

二十人町側から見たアエル。個人の暮らしが企業の占有地に飲み込まれていく



結城登美雄の仕事 地域を歩く、 見る、書く、 サポートする



結城登美雄プロフィール

昭和20年、旧満州生まれ、山形県大江町で育つ。山形大学卒業後広告業界に。現在は東北各地をフィールドワークしながら地域づくりにかかわる。宮城教育大学、宮城県農業実践大非常勤講師。

地域 地理学者はエリアとい

社会学者はコミュニティとい、経済人はマーケットというが、結城登美雄さんにいわせると「家族が住む場所」。都市には都市の家族があり村には村の家族があって、進んでいるとか遅れているとかでは決してない。

それなのに都市中心の世の中では、村は不当に扱われてきた。

精力的に地域を歩き回って田んぼで農民と立ち話をし、漁師と親しくなって漁船に乗せてもらう。その中で見えてきたいろいろな課題…。地域に眠っているエネルギーを引き出す手伝いをしたり、ハツバをかけたリ、人々の記憶を記録化したり…。それが結城さんの仕事だ。

むろん仙台も立派な「地域」。「仙台はだんだん白い街になっていく」。アングラ演劇が華やかだったころ始終来仙していた黒テントのメンバーにいわれたことが、仙台の定点観測の出發になったとか。ただ、結城さんの目は、今は農山漁村に多く向いている。20世紀はカネとモノを求めて日本中が走り続けた時代だった。都市が忘れてきたもの、走っている間に落としたものが、山や海には立派に残っている。それを大事にしたい。「東北の地域」をフィールドワークにできることは何でもやる」と日々歩きつづけている。



人は本来力を持っていきます。 都市の感覚で測るから わからなくなる

結城さんがかわってこられた宮崎町の

「食の文化祭」は、今年も盛況でしたね。町の人口が65000人なのに、訪れた人は8000人とかつて。

結城 1500世帯あるんですが、そこから集まった料理が、伝統的な行事食から日常のおかずや洋風ケーキまで1000皿近く。前日から仕込みをして、会場へ持ってきて、試食品まで用意して、終わったら片付けるところまで各自やる。作った人、手間かかるだけで1銭も儲からない。どうしてそんなに集まったんだと思いますか。地域のため、なんてことじゃないですよ。あれ、予算50万だったんですから。コンテストとか賞金出すとかいえば集まるだろう、なんてのは、都市の発想。講や結いの「お互い様」の組織がきちつ



とあるからですよ。台の力、なんて簡単にいうけど、本当にそのことわかってんのかと思う。

昔、隣近所がお葬式なんかで手伝いあった組織ですね。結いは田んぼ仕事や屋根ふきなど労力の助け合い。今でも日常的に生きていますか。

結城 宮崎町には鍬柄講くわがしらってあるんです。自治区が28あって鍬柄講は50くらい。そこで入会地とか共同山とか持ってます。何10年も前に植林したのを今でもみんな手で手入れしてるんです。道路清掃もドブさらいも定期的にやっつて、冠婚葬祭があれば出てきて手伝う。そういうのを都市的感覚から見ると「煩わしい、だから農村に若者いないんだ」っていうけども、しかしそういうものは必要があったから残ってるんです。法事だって、このころはさすがに仕出し屋さんから取りますが、それ以外にみんな必ず1品持つてくるんです。大皿にそれぞれのを分けて、みんなの間に回して取って食べる。そういう「お互い様」の日常が土台にある。

そんなのは地域作りの中では小さいことだ、金さえあれば、イベントが派手であれば、なんて、ずっと思われてきた。でもそれ、おかしいよ。コンビニもない、スーパーもない、





遅れてる地域みたいな言い方されるけど、畑がちゃんとしているんですよ。50種も70種も畑で作って、春には山菜が次々やってきて、秋にキノコが採れて、夏には川で魚が捕れて、それを焼き干しにして取っておいて、冬には漬け物作って、だれそれさんの法事だからウドの煮物を作っというところと仕込んでいるわけ。パブルが崩れようが不景気になるうが、もともと地域が持っていた力の一部が「食の文化祭」として表れたにすぎないんです。

結城さんのお仕事は、そういう地域の力を広く再認識させることなんです。

結城 すべての人に知らせたいとは思わない。地域の人々が、自分のことを「遅れてるんじゃないか」と自信が持てなくなってる。そんなふうにならなければいい。周囲です。それくらい気付かないと駄目なんです。気付かない連中ほど大きな顔して、地域アドバイザーとかプランナーとかいってる。人間は本来力が

あるわけですね。それが「活性化」なんて看板が掛かると、不当に縮み込んだり、遅れてると思わされたり。大事なものは、そこに住んでいる人がどんな生活を送りたいのかということ。

ぼくの生まれたのは全世帯7軒で、特産品が炭と灰焼きだったくらい山村なんです。高校・大学へ行くやつなんかほとんどなかった小さな村。でも春なら春の田植え前の時期に、仕事をお昼でやめて風呂に入って、80歳のおじいさんから若いお嫁さんまで村のお社に紙と筆を持って正装して集まる。そこで連句をやる。「ああうまいなあ」とか「なかなか奥が深い」とかいいながらベスト5くらいを神様に奉納して、酒飲んでご馳走食べて楽しむんです。人は真つ黒になって働くけど、働くだけじゃないだろう、楽しむもんだって楽しんでいた。そういうのを文化人っていう。日本の文化の7〜8割は農漁村で生まれた。役人の都合で、金が入れば地域の活性化だと思っような考え方からは、そろそろ解放されたいほうがいい。

結城さんが地域に目を向けだしたきっかけは、どんなことだったんですか。

結城 84年に気仙沼で全国地域水産シンポジウムってやったんです。現場の漁業者たちに集まってもらって、今抱えている問題を話し合おうってことで、全国キャラバンをやって、作家の開高健に基調講演してもらったり、気仙沼はじまって以来の大きな出来事みたいに取り上げられた。ぼくは広告の仕事をしていたんですが、広告という道具は地域が抱えている課題に結びつけることもできるんだなあと思った。

そのあと唐桑で「臨海劇場」というのをやりました。金もない何も無いっていうから、どこの家にもある大漁旗をつないで劇場作っただんです。使われていない古いカツオ節工場

を舞台に、竹を切ってきて檜を組み、養殖やつる連中に協力してもらって海にも舞台作った。檜を甲板に叩きつけて歌うドヤ節であるんですが、それフィナーレに歌ったら、見ていたみんなが泣くんですよ。自分の知っている人の知っている話を劇にしたのに、みんなでやることによって感動を呼ぶ。で、3カ月も4カ月もかかって苦勞して作った劇場を壊すと、あとは何も無いもの風景に戻る。港へやってきて、「あれ、ほんとにやったんだよね」「おもしろかったな、またやっぺ」となって、100人くらいで5年続けた。

それが日常的な活動へつながっていくんですね。

結城 その後「木の学校」とか、いろいろやりました。気仙沼の畠山重篤さんが「森は海の恋人、山に木を植えよう」とて海と山のつながりを全国に訴えたけど、あれはシンボリックな意味でね。山に木を植えたって、すぐにどうということもない。昭和20年代、山村もそうだけど漁村だって戦争でやられたために木をずいぶん切り出したでしょ。戦後間もなくのキャサリン・アイコン台風の被害は大変なものだったんですが、山の木がなくなっただけが大きいんです。その反動として、住宅を作るために杉を植林した。植林するのは1町歩あたり苗を280本植えるのが基本です。奨励するために400本植えた。それから間伐していくわけです。ところが30年代に外国から安い木材が入って価値が下がってくると、手入れをしなくなる、荒れ放題になってきた。鬱蒼たる、というところよさそうだけど、密植で光の当たらない、ひよるひよ



食の文化祭
祝い膳を再現したのだから、結婚式も...

ろの木ばかりの杉林。そういうのがあちこちにあるんです。雑木林を常緑樹の杉にしてしまつと植層が変わって海へ養分が流れないってこともあるし。それをどうするかの問題ね。それで、山に木を植えるのも大事だけれど、何10年前に植えた木をどうするんだというようなことを、「臨海劇場」やった連中と話し合った。40年育てた一抱えもある杉の木が、1本3500円ですよ。間伐材なんかどうなりますか。シイタケのホダ木、1mに切つて穴あけて150円。生活できませんよ。それからたとえば、カムバック・サーモンなんて各地でサケを放流している。日本全国で1年間に放されるサケの卵が20億粒。漁師にしたら「やめてくれ」というのが本音なんです。秋になると、それが親になつてどつと

帰ってきます。サケってのは獰猛な魚でね、回遊しながら海岸近くの稚貝、小魚、海藻、全部食べてしまう。海藻ないから、ほかの魚は卵を産み付けられない。40年代までやってきたニシンが全然来なくなったのはそのせいもあるって、漁師はいつています。食物連鎖の上のほうにいるサケを大量に増やして連鎖の秩序を壊しておいて、子ども自然教育だとかね。世の中の人知らなすぎるんですよ。現場へ行かずに、断片的な情報だけで判断する。現場なき地域作りみたいなもの。

豊かな海ってのは朝港を出て夕方帰ってくる範囲の海。200海里じゃないんですよ。それが、どんどん大型機械を入れていった。マグロの延縄はなな、幹縄の長さが1隻で150km、これで5匹捕れたら今は大漁。大漁って言葉が極限まで小さくなっている。

それだけ捕りすぎたということですか。結城 そう。それは漁師が一番知ってる。知らないのはマスコミとか、現場へ行かないやつばかり。ぼくの友人の船会社なんかも、みんな倒産してますよ。そういうところでぼくができることは、せめて知らせることですよ。そういうことを少しやるのかなあと。

それで、人があまり行かないような場所を歩き出したんですね。

結城 広告のデザイン事務所をやっていたから、いろんな仕事をやらざるを得ない。だんだんそういうの嫌になって、3年半かけて解散しました。ぼく一人になってから、朝日新聞が「何か書かないか」と声をかけてくれて、書き出したのが「山に暮らす海に生きる」。都会の感覚で見たらダメなんです。時間に

したつて、8時9時に行っても誰もいないです。それ見て、マスコミの連中は「寂しい農村である」なんて書きたがる。夏だったら4時半か5時には行ってないと人にも会えない。ぼくはそこへ行って待ってるわけです。田んぼでじいさんがぼくを見つけて、「どこから来たんだ」となりますね。「仙台から来た」というと、相手の警戒感がふつと和らぐ。仙台が百万都市だというのは、東北全部から集まってるから。孫が仙台の学校に行ってるとか、息子が働いてるとか、隣の娘がとか、なんらかの縁を持つてるんです。仙台市民の3分の1から半分は東北ですよ。仙台を考えると東北を考えることで、東北を考えることは仙台を考えること。地域というのは「家族が住む場所」って意味。家族の希望を実現するのに、個人でやればできることは多いし、家族がサポートすればできることもある。でも、それでもできないたくさんある。だからそれをみんなでやる。それが地域作りだと思っ。文化施設がどう、経済の活性化がどう、なんてことよりも、講があったり、それを支えたりする土台のほうに、いい地域作りが見えてくると思っんです。



典型的な山あいの田

現在。豆炭屋が消えてガソリンスタンドに。街中央部の一部に組み込まれたこのあたりは、道幅が狭いためスタンドも消えるだろう



昭和43年、通町の豆炭屋。その前は薪炭屋。かつては仙台の北端で、根白石方面から薪炭が運ばれた



区画整理された田園地帯に都市化が迫り、やがて典型的なベッドタウンに



町は生きている
町は生きており、
日々変わっている





ある地域の試み

唐桑臨海劇場

結城登美雄さんの出発点になった唐桑町の臨海劇場。唐桑町の住民を主役に、早稲田大学学生やアングラ劇団黒テントのメンバーも応援に駆けつけた。記録ビデオを作成して唐桑船籍の全船にも送付。多くの力を結晶してできた劇場だが、祭りを作つた本当のエネルギーは、地味で目立たない日常の中にひそんでいる。臨海劇場は5年で解散。観光の人寄せのための劇場ではない。目的を果たしたら、次へ向かって別なことがはじまる。



▶今は使われていない古いカツオ節工場があった



唐桑の海



演技者も観客も地元の人



大漁旗を集めて縫い合わせ、劇場を作る

看板衣装をまとめて浜に立つと漁師の血がたぎる。
海の彼方に見えるひそやかな明日



湾内も華やかに